

青山教会会報

「私の家族がここにいます」

創世記二章二三節

マタイ福音書十二章四六〜五〇節

牧師 増田将平

「この人は大工の息子ではないか。母親はマリアといい、兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。姉妹たちは皆、我々と一緒に住んでいるではないか」

これは主イエスの家族について近所の人々が言ったことです。ある時主イエスが説教をしておられると主イエスの家族が訪ねて来て、何やら話したいことがあって外に立っていました。父ヨセフは登場しません。おそらくヨセフはすでに亡くなっていて、主イエスは一家の長男として家族を支えてきたのでしょう。家族は主イエスのことを聞いて取り押さえに来たようです。「あの男は気が変になつてゐる」と人々から言われていたからです。

すると主イエスはご自分の家族が呼んでおられることを知り、言われました。「わたしの母とはだれか、わたしの兄弟とはだれか」。まるで家族を突っぱねるような発言です。この言葉は一体、何を意味しているのでしょうか。

主イエスは家族のつながりを否定しておられるではありません。十戒には「あなたの父母を敬え」とあります。主イエスは十字架上で母マリアの今後を案じて母に言葉をかけています。

聖書はこの時の家族の態度を「外に立っていた」と強調して記します。主イエスの周りには大勢の群衆がいましたが、「私どもはあのイエスの家族です」と言えば中に通してもらい群衆と一緒に主イエスの話に耳を傾けることもできました。ところが家族は外に立ったまま、人をやって主イエスの説教を中断させたのです。主イエスの家族は主イエスの身内でありましたが、「外に立っていた」のです。これまで主イエスと同じ屋根の下で過ごしてきたから、主イエスのことはよくわかっていと思うたのでしょうか。でも本当には主イエスというお方をわかっていなかったのです。

主イエスは、私どもに、問われます。

「あなたは今どこに立っているのか」
そして私どもを「自身のそばへと招いておられます。」

主は言われました。「私の天の父の御心を行う人が、私の兄弟、姉妹、また母である」。神様の御心はどうしたらわかるのでしょうか。神様の言葉に聞く他はありません。だから群衆は主イエスの言葉を聞いていました。主の家族は人々の噂には耳を傾けましたが、主イエスご自身の言葉には耳を傾けなかつたのでした。

大事なことです。主イエスは「天の父の御心を行うならば私の家族になれる」とは言っていません。弟子たちは御心を行ったから、主イエスの家族となつたのではないのです。主は弟子たちを指差して、「ここにゐる者たちは、御心によつて生きてゐるのだ」と言われました。主は弟子たちの睦まじい、アットホームな雰囲気を目指して、「ご覧、こういうのが神の家族だ」と言ったのでもありませんでした。弟子たちは主イエスから「私の家族」と言われたのにもかかわらず、後に「私どもの中で誰が一番偉いか」と言い争うようになり、やがて弟子たちは主イエスを見捨てて逃げ去つて行くのです。

ある牧師がこんなことを言っています。「『アットホームな教会』という言い方があります。教会に集う人たちの親しさがあり、優しさが溢れている姿があり、居心地の良さを感じて使われるのでしょうか、それは聖書の伝える家族の姿からすれば一面的ですよ。『アットホーム』というからには、聖書が述べている人の醜さ、罪深さが現れるということも含まれている、と言う方が良いのではないのでしょうか」

たしかに聖書に出てくる家族の話はあまりにも人間臭いところがあります。創世記二章から登場するアダムとエバの夫婦がいます。今朝の旧約聖書の言葉はアダムからエバへのプロポーズの言葉です。ところが、この夫婦は互いに隠し合うようになり、自分の過ちを責任転嫁します。この夫婦の息子であるカインは弟アベルを殺します。イサクの家族においては息子ヤコブが兄と父を騙し家族の絆が断たれてしまいます。ヨセフは父ヤコブから特別扱いされた結果、兄弟たちに妬まれ商人に売られます。聖書には私どもが想像するようなアットホームで問題のない家族を見つけてるのは難しいのです。聖書は家族を理想化していません。むしろ、

そのような破れかぶれの家族を、主がどのように赦し、導いて、祝福されたかを聖書は語っています。

主イエスが指差しておられるのは弟子たちを主イエスの家族ならしめておられる「私の天の父」です。ヨハネによる福音書の六章にこのように記されています。「私が天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、私をお遣わしになった方の御心を行うためである。私をお遣わしになった方の御心とは、子を見て信じる人が永遠の命を得ることであり、私がその人を終わりの日に復活させることである」

「永遠の命」とは、いつも神様の家族の一人として生きる命です。主の弟子たちのように人と自分を比べて一喜一憂する人、先ほど紹介した創世記の家族のように、夫婦、親子、家族の愛に破れてしまっている人をご自身の家族にすること、ご自身の愛の絆の中で生かすこと、それが父なる神様の御心です。だからこそ、主は弟子たちを指して「ここに私の家族がいる。これは私の兄弟、姉妹だ」と宣言されたのです。「これは私の兄弟、姉妹」との言葉は、聖餐において読まれる主の言葉と似ている、とある人は言いました。

「これは私の体である」「これは私の血である」と主イエスは聖餐を定める時に言われました。「血は水よりも濃い」と申しますが、キリストは私どもをご自身の家族とするために、血を流してくださいました。

主イエスは、私どもをも指差して言われます。「ここに私の家族がいる」「これぞ我が母、我が兄弟」「ついにこれこそ、私の骨の骨。私の肉の肉」と。

私どもは自分の力で御心を行うことはできません。説教において父なる神の御心に聞き、主の御手に助けられて御心を行うことができます。

父なる神の御心は、私どもが主イエスの家族となることで終わったものではありません。「誰でも、私の天の父の御心を行う人が私の家族である」。これは全ての人への招きの言葉です。父なる神は、全ての人为主イエスの兄弟姉妹となることを願っておられます。私どもはそのために、天の父なる神の御心と信じて新しい会堂をお献げしようとしています。これから道のりにおいて、どんな時も私どもの上には主の御手が置かれています。祈りつつ進みましょう。御心が行われますように。天におけるように、地の上にも。